

安倍元首相が凶弾に倒れ、また、ロシアによるウクライナ侵攻が長期化の様相を呈し、そこで思うことは、今、私たちが覆っているものが一体何かということです。それは、もちろん、神様の祝福です。けれども、その一方で思うことは、それは、もしかしたらむき出しの暴力ではないかということです。しかし、そういう私たちが力で押さえつけるものと戦ってきたのが、戦後数十年の私たちでもありました。それは、先の大戦を通じて、戦争を始め、むき出しの暴力というものがいかに人間の尊厳を深く貶めるかを私たちは身をもって知ったからです。ところが、時計の歯車を逆転させるような出来事が次々と起こっている、そして、もし、そうした時代に逆行するようなら、では、そこで私たち信仰者はどのように振る舞えばいいのでしょうか。

貧すれば鈍すと言われていたように、それが私たち人間の側面でもあるのでしょうか。けれども、そこでものを言うのが私たちの信仰です。それは、私たちの信仰の本質は神様による赦しにあるからです。ですから、戦後、多くの人々が教会に連なり、教会が今日を迎えることが許されたのは、この神様の赦しあつてのことでもありました。ただ、問題の渦中にある時はどうだったのでしょうか。その優先順位が二の次三の次にされてしまったのがこの神様の赦しでもあったのでしょうか。それは、私たちの置かれた現実から見れば、神の赦しは余りにも遠くかけ離れたもののように見えるからです。そして、日本基督教団始め、キリスト教会の歴史がまさにそのことを私たちに教えてくれているように思います。けれども、時間の歯車が逆回転しているかのように見える今だからこそ、私たちは、どうすればその同じ轍を踏まずにいられるかを考えなければなりません。そして、そこで忘れてはならないことは、いかなる状況にあっても、私たちが依って立つところは聖書の御言葉であり、それは、今のこの状況においても同じだということです。いや、今、私たちがむき出しの暴力に晒されているとしたら、なおのこと、聖書の御言葉に依って立たなければならぬのです。それが、先の大

戦を通じて私たちが学んだことなのではないでしょうか。ですから、この日の御言葉は、そのために、ある重要な事実を私たちに伝えてくれています。それは、聖書の御言葉は信じるに値するということです。

そこで、この日の御言葉が私たちに先ず何を教えるのか、それは、むき出しの暴力の曝されているのは今この時を生きる私たちだけではないということです。「ヨハネは牢の中で」と御言葉にあり、また、セフスの「古代誌」によれば、領主ヘロデによってマケルス要塞に幽閉されていたと言われていたように、むき出しの暴力に曝されていたのが洗礼者ヨハネでありました。しかも、マタイの14章ではその死が報告されているように、ヨハネに許された時間は残り僅かでもありました。ですから、そのことを日々ひしひしと感じていたのがこの時のヨハネであったわけです。それゆえ、ヨハネの命を受け、その弟子たちがイエス様に語ったことは、むき出しの暴力に喘ぐ、洗礼者ヨハネの率直な思いでもありました。そして、そのヨハネの命を受けた弟子たちがイエス様に語ったことが、「来たるべき方は、あなたでしょうか。それとも、他の方を待たなければなりませんか」というこの一言でもありますが、ただ、そのヨハネの心中にあったものは、むき出しの暴力を前にしたイエス様への不信、懐疑でありました。それは、牢に繋がれ、明日をも知れぬこの時、ヨハネはイエス様が救い主メシアであるかどうかどうしても分からなくなってしまったからです。それゆえ、その思いはイエス様への懐疑に止まるものではありませんでした。

ヨハネとイエス様の関係は、いわば、一蓮托生の関係にあったと言えるのでしょうか。それゆえ、イエス様への疑いは先見者として働いた自らに対しても疑いとなって現れることとなりました。ヨハネが残り少なくなった時間の中で、自らがなしてきたこと、そして、その亡き後のこと、これらのことが頭の中でぐるぐる回って、分けが分からなくなったのはそのためです。そして、それは、イエス様との繋がりに自信が持てなくなっていたからでもあります。ですから、このヨ

ハネの気持ちは私たちにも分からなくは
ありません。では、そのような時、私た
ちなら何をするのでしょうか。それは、
疑念を振り払い、苦境を脱しようとする
ことです。ヨハネが弟子たちをイエス様
のもとに送ったのはそれゆえのことでも
ありますが、ただ、私たちの歴史が証明
していることは、むき出しの暴力に曝さ
れた時、私たちの気持ちは、神様とはま
た別のところに向かうということです。
ですから、そういう意味で、疑念を晴ら
すべくイエス様を訪ねたヨハネと私たち
は同じではありません。同じ状況の中で
イエス様への疑念を深める時、私たちの
心はイエス様に向かうのではなく、もっ
と別の何かに向かうとするからです。
それは、ヨハネとは異なり、私たちはイ
エス様に会ったこともなければ、その声
を聞いたこともないからです。このよう
に直接的にイエス様と繋がっているとの
確信が持てないために、私たちはどうし
ても別の何かに頼ろう、すがろうとし
てしまうことがあるのです。従って、この
事実は、聖書の御言葉を信仰の基盤とす
る私たちにとっては、重大な意味を持つ
こととなります。直接的な経験を持つて
いないということつまり、救い主たる
イエス様の姿は、実のところでは、聖書
の御言葉の中に隠されたままであるとい
うことだからです。

ただ、そうであればなおのこと、私た
ちは、このヨハネの率直さに学び、イエ
ス様のことをもっと深く知る必要があ
るのではないのでしょうか。しかし、率直に
なれと言われ、私たちがそれですぐにそ
うなれるわけではありません。けれど
も、そうであるからこそまた、そこでや
ってみることが必要なのです。ただし、
問題はイエス様のその時の対応です。や
ってみるのはいいとして、では、実際に
ここでやってみているヨハネに対してイ
エス様はどのように応えておられるので
しょうか。4, 5節では「行って、見聞き
していることをヨハネに伝えなさい。目
の見える人は見え、足の不自由な人は
歩き、重い皮膚病を患っている人は清
くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死
者は生き返り、貧しい人には福音を告
げ知らされている」と、イエス様はヨハ
ネの弟子たちの問いかけにこう答える
のです。けれども、このイエス様の返答
はユダヤの人々にとってはおなじな
印象を与え、おなじな印象を与え、お
なじな印象を与え、おなじな印象を
与えるものでもありません。なぜなら、
聖書の御言葉に精通している者なら
誰でも知っている、目新しさをま
ったく感じさせないものでもあ
ったからです。しか

も、イエス様がその上で仰ったことが
「私に躓かない者は幸いである」とい
うこの一言でありました。このこと
は、ヨハネの聞きたいことには
何一つ答えてはいないということ
です。つまりは、ヨハネの率直さは、知
りたいことを知る上で何の役にも立
たなかったということなのです。で
すから、このことはまた、役に立
つか立たないか以前に、私たちに
ある一つのことを教えてく
れていきます。それは、私
たちだけでなく、イエス様と
直接対峙した者にも、イエ
ス様はその本当の姿を隠され
たということなのです。

従って、そこから分かることは、イ
エス様と私たちとの間にある大きな
壁です。そして、この壁は、ヨハ
ネの率直さをもってしても直ちに
打ち破ることのできないものだとい
うことです。ですから、最後の
ところで語られている「笛を
吹いたのに踊ってくれなかつた。
葬式の歌を歌ったのに、悲しんで
くれなかつた」というこの言葉は、
イエス様と私たちとの間にあるこの
壁が、非常に強固であることを物
語っているように思えます。それ
ゆえ、イエス様のお気持ちは私
たちには分からない、ここでのこ
とは、この事実を伝えてく
れているようにも思えます。
しかし、私たちはそのまま手
をこまねいているわけには参り
ません。何としてでも、この壁を
こじ開けなければならぬ、そう
でないといつまでもイエス様と
繋がることができないから
です。それこそ、ヨハネの場合
であれば、その死は無駄死に
ということにもなりますし、
今を生きる私たちにと
っても同じ意味を持つこと
にもなるからです。しか
し、そのように自分にしが
みつくようにしゃかりき
になって、私たちは
イエス様についての何を知
ることができるのでしょうか。

ヨハネの弟子たちが去った後、イ
エス様が群衆に語ったことは、ヨハ
ネが「預言者以上のもの」であるとい
うことでした。それだけではあり
ません。「およそ女から生まれ
た者のうち、洗礼者ヨハネ
より偉大なものはいない」と
まで仰るのです。さらには、
ユダヤの人々であれば誰
もが知っているエリヤの
名前を出して、それがヨハ
ネであるとまで言い放
つたのです。このように
ヨハネへの賛辞を惜しま
なかつたのがイエス様
であります。それは、
このヨハネについては誰
よりもよくご存知である
との思いがイエス様
にはあったからです。
ですから、ヨハネの
ことを誰よりも敬意を
もって見つめ

ておられたイエス様がヨハネに対してその姿を一方的に隠されたとは思えませんが、従って、疑念を深めるそのヨハネに向かつて語った「私に躓かない者は幸いです」というイエス様のこの一言は、ヨハネを突き放し、関係を断ち切るものではありません。ただし、私たちがそれを知るには、ある一つのことを心に留める必要があるのです。なぜなら、ここに記されていることは、私たちが見失いがちなものにして、そのために疑いを強めてしまおう、ある大切な一つのことを私たちに語りかけようとしているからです。

むき出しの暴力に曝された時だけではありません。何が正しく、何が間違っているか、それすら分からなくなるのが、私たちがこうして生きていくというでもあるのでしょうか。それゆえ、私たちは是か、それとも非かと問いつつ、その生涯を過ごすことになるのです。ただ、そのような私たちの生涯は、ちょうどこのヨハネがそうであるように、信じつつも信じられないという、矛盾に満ちたものでもあるのです。それゆえ、そこには苦しみがあり、悲しみがあります。こうして、私たちが自ら良しとするものと、非とするものとの間に繋がりを見出すことができず、まただから、私たちがそういう自分自身を認めることができず、苦しむことにもなるのです。それゆえ、このことはまた、イエス様に対するものの見方にも深く、影響を与えることとなります。そして、それは、むき出しの暴力に曝され、明日をも知れぬその時になおのことです。それゆえ、そのような中で語られたイエス様の言葉は、私たちの心の深いところにすぐに届けられることはありません。それは、イエス様と私たちの間に壁があるからだとも言えるのですが、けれども、その壁とは私たちの心の中の苦しみであり、その悲しみです。これらのものが私たちの心を固く閉ざしてしまっているために、イエス様の言葉は私たちの心の奥深くまで届くことができずにいるのです。つまり、先ほど申しましたように、イエス様が隠れているとの思いを募らせるのはそれゆえのことだということなのです。

従って、その責任はイエス様にあるのではなく、むしろ、私たちの側にあります。ただ、その責任を追及して、あるいは、その問題点を指摘して、それでイエス様の声が私たちの心の奥深くに届けられることになのでしょうか。私はそれは絶対にはないと思います。私たちは苦しいし、痛いし、悲しいのです。それを私

たちは自分の力で取り除くことができなから、だから、なんとかしてこの痛みを癒やして欲しいと願うのです。私たちが分かりにくいイエス様の言葉でなく、それ以外の何か心に奪われてしまふのはそのためです。けれども、私たちがこの痛みをイエス様はよくご存知である、それは、ヨハネの苦しみに対して、イエス様が「私に躓かない者は幸いです」と仰ったこの一言から分かります。それは、むき出しの暴力に曝されているこのヨハネに向かつて語られたこの一言は、私たちが真っ先に思うその言葉とはまったく別の次元の言葉でもあるからです。

信仰がぐらついている者に向かつて、私たちが往々にして語ることは、「信仰をしっかりと持て。神様を信ぜよ」というこの一言です。けれども、イエス様はここでは、だから信ぜよという言葉でヨハネに語ってはおりません。仰ったことは、「私に躓かない者は幸いです」とこの一言です。それは、言葉だけでその人の痛みが解消しないことをイエス様はよくご存知であったからです。このことはつまり、私たちの信仰は言葉だけのものではないということなのです。けれども、イエス様がご自分のことを知らしめるには言葉を用いるしかありません。ただし、そこで大切なことは、言葉を理解するための知識や理解力ではありません。躓かないということがそのまま繋がっているということの意味するように、私たちがイエス様に繋がっているということ、それがイエス様の言葉を理解する上での大前提であるのです。ですから、私たちはそこである一つのことを心に留めなければなりません。それは、言葉の持っている避けることのできない宿命のようなものです。言葉は語ることによって、ある真実を照らし出す一方、語り得る範囲を限定するために理解を疎外することがあるということなのです。ここでは、イエス様の「私に躓かない者は幸いです」との言葉がちょうどそういうものだと思うのです。

ヨハネに疑念が湧き起こったのは、イエス様との関係性がまったく何も変わってはいないにもかかわらず、自分でイエス様のお言葉の意味を狭く受け止めてしまったためでありました。それは、ヨハネがイエス様に対して心を閉ざしかけていたからでもあります。けれども、そのヨハネに対してイエス様は敬意を失ってはいない。それだけでなく、そんなヨハネのことを理屈で説き伏せようともしていない。私はここにヨハネに向けられ

たイエス様の優しさと深い信頼を見る思いがするのです。そして、それは、ヨハネが躓かないからではありません。躓くことをご存知の上で、ヨハネとか関わり続けておられるのがこの時のイエス様でもあるのです。それゆえ、イエス様のその思いが私たちの躓きとなることはありません。なぜなら、主の御前に立つ者は、イエス様によって、主にあつて赦されている者でもあるからです。またただから、イエス様は、ここで「信ぜよ」と信仰を強制し、私たちの信仰を奮い立たせようとはしないのです。それは、それが私たちにできないことを誰よりもよくご存知だからであり、つまりは、繋がっているということはそのようであるから

このように、イエス様はヨハネの問いに対して決してはぐらかしているわけではありません。ヨハネの率直さに対して、イエス様は率直さをもって答えておられるのです。けれども、それが分からなくなるのが、むき出しの暴力に曝されるような、自分の力ではどうすることもできないその時です。そのため、私たちは自分の内側に閉じこもり、イエス様に対する率直さを失い、そして、イエス様との繋がりを、イエス様と一つであることを見失い、イエス様以外のものとの繋がりを深めようとするのです。ですから、最後のところに記されていることは、そういう他との繋がりを求める、まさにイエス様に躓いた者の姿であるように思うのです。それゆえ、イエス様に率直に答えていただくためにも、ヨハネのような率直さが求められるのですが、では、どうすれば、私たちは、イエス様との繋がりを恐れずに、率直に正直に素直に自らのその思いを言葉にすることができるのでしょうか。私はそのことをまたみくの子どもを通して教えられました。

10日ほど前のことです。ある女の子が私に向かって突然「年はいくつなの」と尋ねてきました。そこで不思議に思った私は自分の年をいう前に、「どうして」とその理由を尋ねたのです。すると、その子は「ずっと一緒にいたいから」と言ったのです。当然、私は飛び上がらんばかりに大喜びをしたのですが、喜びつつ、待てよと思ったのです。それは、私に「いくつ」と尋ねたその時、その子が私の髪の毛をじっと見つめていたからです。つまり、私の髪の毛の白さを見て、私とはずっといつまでもいられない、その子はきっとそう思ったんだと思ひます。ただ、こうした率直さは子どもなら

ではのものであうのでしょ。けれども、私たちが子どもと同じようにすることも難しいようにも思うのです。けれども、その子が私にも向かってそういうことではありません。そこにはいろいろな時間が確実にあり、それにももちろん、私は保育に参加してはおりません。ぐだぐだの隣にいる親父のようなものです。でも、その子は私のぐだぐだを率直に認めてくれた、私はそれが嬉しかったのですが、つまりは、嬉しいという気持ち、悲しいという気持ち、嫌だな、辛いなという気持ち、そういう気持ちを気持ちとして日常的に互いに表しているからこそ、そこに確かな繋がりが生じたということではす。そして、私たちの信仰においてとても大切なことがこの率直さだと私は思うです。

けれども、だから、無理をして、ということではありません。私たちのいるところはどこかというところなのでしょう。そこで私たちはどのように過ごすことが許されているのでしょうか。この点において、私たちが子どもから学ぶところは大きいように思います。では、そこで学ぶ一番大きなものは何か。それは、何ができ、どんな結果を残すかということではありません。ここに、今ここにいる私たちと共にイエス様はいる。私たちが今いるところはそういうところであり、だから、私たちは自らを誇るように勇ましいことをいう必要もなく、イエス様にあつて、主にあつて、ありのままの自分自身を教会というこの場所で現すことができるのです。そして、そのために私たちに求められていることが、主にあつて、イエス様と共に、ということではす。つまり、イエス様との繋がりが、この繋がっているという感覚が大切なのであり、そして、私たちが人に対しても、また自分に対しても、率直に、素直に、正直に、そして、何よりも誠実に自分自身を現すことができるのは、すべてのものの中に主が、イエス様がそこに立っておられるからではす。ですから、もし、今私たちがむき出しの暴力に曝されていたとしても、それゆえに心配するには及びません。イエス様がその私たちと共にあるからではす。ですから、そのことを深く深く心に留めて、明日という日を感謝と喜びをもって迎えることのできる私たちでありたいと思ひます。祈りましょ。